

令和 3 年 6 月 21 日現在

機関番号：32636

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K11826

研究課題名(和文)南アジアにおけるマイノリティの生存戦略 包摂と排除から共棲へ

研究課題名(英文)Survival Strategies of Minorities in South Asia: Towards Cohabitation from Inclusion and Exclusion

研究代表者

井上 貴子 (Inoue, Takako)

大東文化大学・国際関係学部・教授

研究者番号：10307142

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、南アジアのマイノリティの生活世界における日常実践に焦点をあて、彼らの声と活動を掘り起こすものである。また、生活防衛のための手段にも着目し、彼らの生存戦略を明らかにする。事例研究に基づき、理念的市民社会における上からの改革を目指す「包摂と排除」という従来型の視点とは異なる、実質的な生活世界における下からの視点に根差した「ゆるやかな共棲」という新たな理論的枠組みを提示する。実際には、まずは他者の空間的実践を承認し、日常生活の改善のために互いに交渉し、生活世界における「共棲」のために合理的かつ説得力のある戦略を不断に実行していくことが重要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

グローバル化する現代社会における宗教やイデオロギーを核とする諸集団の対立に関する研究が問題提起するのは、今日社会構造の異種性・多元性とそこに生きる人々の「共棲」の困難である。従来型の社会的包摂の理念に基づく政策は、逆にマイノリティの排除を招き、諸集団間の対立を先鋭化させてきた。そこで必要とされるのは「共棲」の理念をマイノリティの視点から再考することである。本研究では、対立する諸集団の居住する空間の共有と分有のための実践的な戦略として「ゆるやかな共棲」という新たな理論的枠組みを提示したことに意義がある。

研究成果の概要(英文)： This research project unearths the voices and activities of minorities in South Asia through focusing on their daily practices carried in living spheres. We also shed light on their survival strategies by exploring on the way of protecting their lives. Based on our case studies, we propose the concept of “gentle cohabitation” on the viewpoint of the substantial living spheres from below as an alternative theoretical framework, instead of using conventional terms such as “inclusion and exclusion” on the viewpoint of “top-down reform” of the ideal civil-society from above. At the practical level, it is important that one should first recognize the other's spatial practices, negotiating with each other for the improvement of daily lives, and repeatedly formulating reasonable and convincing strategies to cohabit in living spheres.

研究分野：インド芸能文化史

キーワード：南アジア インド バングラデシュ ダリト ムスリム カースト ジェンダー 共棲

1. 研究開始当初の背景

(1)南アジアの社会変動と価値観のゆらぎ

カーストや宗教、民族やジェンダーなどをめぐる対立と共存の諸相は、南アジア地域研究の主要な問いであり続けてきた。近年、指定カースト・指定トライブやその他の後進諸階級、またムスリムをはじめ宗教的マイノリティに対する留保制度や助成制度、それらの政策をめぐる諸問題を、社会的な包摂と排除の概念によって分析する研究が増加している。しかし、社会の分断や格差を、上からの政策によって解決しようとする姿勢がさらなる排除を招いてきたことも指摘されている。また、新自由主義グローバル化、拡大するテロや暴力などの諸問題への対応、南アジアの大国であるインドの国際的プレゼンスの増大に伴う周辺諸国への影響力の深化、地域固有の文化伝統や価値観のゆらぎなど、今日の南アジアの社会変動の行方を見定めるのは、研究者にとってますます困難な課題となっている。

(2)マイノリティ研究における包摂と排除の視点の相対化

新自由主義グローバル化の進行に伴い、南アジアは成長センターの一角を占めるようになったが、同時に域内の社会経済発展の地域間、宗派間、社会集団間、都市農村間の格差は急速に拡大した。特に、ヒンドゥー・ナショナリズムに代表される、新自由主義経済の勝者で欧米との交渉力に長けた高カースト・ヒンドゥー知識人の価値観がますます強化されている。これにより、多様な価値観をもつ集団間の対立や分断は深まっているのではないかと。ダリト(被差別民、指定カースト)のキリスト教徒や農村のムスリム女性といった、カースト、宗教、地域、ジェンダーなどの面から二重三重のマイノリティ性を背負わされた人々は、選択肢がますます狭まる格差社会で生きることを強いられながらも、多様な生存戦略によって生活世界を防衛すると同時に、グローバルな社会変動に対応している。その実態を明らかにするためには、上からの政策に基づく包摂と排除の視点を相対化し、下からの視点に基づいて考察する必要がある。

(3)社会構造の異種性・多元性と諸集団の「共棲 cohabitation」

グローバル化する現代社会において先鋭化する、宗教やイデオロギーを核とする諸集団の対立に関して『公共圏に挑戦する宗教 ポスト世俗化時代における共棲のために』(ハーバマス他、2014)は、多様な価値観をもつ集団の共棲が不可避な世界の壊れやすさ傷つきやすさを指摘する。『統治される人々のデモクラシー サバルタンによる民衆政治についての省察』(チャタジー、2015)は、市民社会と政治社会の葛藤と対立を分析する上で多元的空間とそこに流れる異種混成的な時間に注目する。以上の文献が問題提起しているのは、今日的な社会構造の異種性・多元性とそこに生きる諸集団の「共棲」の困難である。問題解決のために実施されてきた社会的包摂の理念に基づく上からの政策は、逆に排除と諸集団間の対立を先鋭化させている。そこで必要とされるのは、「共棲」の理念をマイノリティの視点から再考することである。

2. 研究の目的

(1)生活世界におけるマイノリティの声と活動

本研究では、綿密なフィールドワークや希少な資料の詳細な読みを通じて、特にカースト、宗教、ジェンダーの側面でマイノリティ性を背負わされた人々の声と活動を掘り起こす。今日、グローバル化する世界では、社会的包摂の理念に基づく上からの政策が、逆に排除と諸集団間の対立を先鋭化させ、異種性と多元性を際立たせ、その結果、「共棲」の困難さと不安定性が露呈している。統治機関＝国民国家、あるいは新自由主義グローバル化を体現する多国籍企業に対して、人権意識に基づく要求を行う「市民」は一定の発言力を有するだろう。しかし、特定のマイノリティ集団による生存に直結する独自の要求は、市民社会の合意ばかりでなく、他の多様なマイノリティ集団の要求としばしば対立し、一つの公共圏を形成できない。「親密性」を特質とする生活世界は、より包括的かつ権力的な社会構造によって脅かされる一方、生活世界から上位構造への関与は限定的である。そこで、彼らが自らの生活世界をいかにして防衛し、いかにして地域や国家、国境を超えた広いアリーナへの参入を模索しているのか、彼らの日常的生存戦略を、フィールドワークによるインタビューや実態調査、文芸活動を含む多様な資料の詳細な読解と分析に基づいて明らかにする。

(2)「ゆるやかな共棲」による空間の共有と分有

(1)の視点に基づいて収集されたデータの分析を通じて、多様な生活慣習や価値観をもつ社会集団、そこに生きる人々の「ゆるやかな共棲」あるいは平和的な空間の共有と分有の諸相と可能性について考察する。本研究が構想する「ゆるやかな共棲」において、国・地域・市町村等の空間と時間を共有する諸集団は、共通のアリーナを形成し、協働して解決すべき政治的・経済的・社会的な問題について意見交換を行う。隣接する集団との間に生じる問題は関係集団間で個別

に調整する。一方、各集団は独自の生活習慣や価値観を保持し、互いに承認しつつ関知せず、自らの居住する空間内部でゆるやかな棲み分けを図る。他の集団の関心と要請に応じて自らの独自性を表明することもできる。以上のように、人々が生活する日常的な物理的空間を平和的に共有し、かつ分有する戦略的・実践的方法を追求する。

3. 研究の方法

本研究のメンバーは、各自の事例研究に即して、南アジア各地域で詳細な計画に基づいたフィールドワークを行い、アンケートやインタビューに加えて各種統計から文芸作品に至るまで多様な資料を収集分析する。その結果を共有し、意見交換する中で、マイノリティ集団の日常的生存戦略の実態と特性を明らかにし、「ゆるやかな共棲」の実現に向けた具体的方策を提示する。

(1) フィールドワークの実施

代表者の井上貴子は、南インド、タミルナードゥ州のダリト、パライヤルが太鼓演奏を集団結束のシンボルとし、政治集会や宗教的な場をダリト解放運動における協働性発揮のための空間として利用し、地位向上を目指して政治的発言力を増しつつある過程について調査する。分担者の石田英明は、北インド、ヒンディー語圏で教育を受けたウルドゥー語を母語とするムスリムが、高カースト・ヒンドゥー中心のヒンディー文学界で作家として活躍し、自らの主張を展開する諸相を調査する。篠田隆は、西インド、グジャラート州のダリトやムスリムが、留保制度などを利用しながら、有力カーストが掌握してきた商工業に起業家・経営者として参入するための課題を明らかにする。須田敏彦は、ムスリムが多数を占めるバングラデシュ、コミラ県の農村女性の海外出稼ぎについて調査し、伝統的なムスリムの慣習と女性の葛藤、女性の社会進出がもつ社会経済的意義とそれを促進するために必要な政策について検討する。鈴木真弥は、デリーのパールミーキ(ダリトの清掃カースト)が、公益訴訟やストライキなどの手段を通じて権利意識を高め、政治的アリーナに訴えることで、生活向上につなげている状況を調査する。

(2) 収集資料のデジタル化とウェブサイト開設

収集資料はデジタル化して保存する。本研究の専用ウェブサイトを開設し、フィールドワークの報告及び収集資料分析、各自の研究の進展状況を随時専用ウェブサイトで公開する。

(3) 研究会の開催

年4回の研究会を開催し、各自が収集した資料の分析と研究経過の報告を行う。また、必要に応じて外部の研究者を招いて討論を行う。これによって、マイノリティの日常的生存戦略について各地域の共通点と相違点を洗い出す。さらに「ゆるやかな共棲」について理論的に深め、概念を共有するために意見交換を行う。これによって、マイノリティの日常的生存戦略の特性と「ゆるやかな共棲」の実現に向けての具体的方策を話し合う。

(4) 学会でのパネルと成果報告書(英文)の作成

関連学会でパネルを組んで共同研究の成果を報告し、最終的には英文の成果報告書を作成して世界各地の関連機関に配布すると共に、専用ウェブサイトでも公開する。

4. 研究成果

(1) 学会でのパネル

2020年10月3日にオンライン開催された日本南アジア学会第33回全国大会で、パネル「インドにおけるマイノリティの生存戦略 「ゆるやかな共棲」に向けて」を行った。その概要は以下の通りである。

本パネルでは、マイノリティ性を背負う人々の声と活動を掘り起こし、彼らが自らの生活世界をいかに防衛し、地域や国家を超えた広いアリーナへの参入を模索しているのか、生活世界における日常実践と生存戦略を明らかにした。事例分析に基づき、上からの包摂的な視点とは異なる下からの視点に基づく「ゆるやかな共棲」による空間と時間の共有、あるいは寛容で平和的な棲み分けの可能性について考察した。異種性と多元性を特徴とする諸集団は、協働すべき政治的・経済的・社会的な課題を共有する場を形成すると同時に、隣接する集団間に生じる問題を調整する必要がある。また、自らの生活習慣や価値観を保持し、互いに承認しつつ関知せず、ゆるやかに棲み分けするための知恵を出し合うことが重要であることが確認された。

事例報告として、井上は「タミルナードゥ州におけるパライヤルの宗教・政治・文化活動 太鼓パライは誰のものか」と題して、パライヤルが太鼓演奏を宗教、政治、文化の各分野でダリト解放のシンボルとして流用する諸相を分析、それがいかにダリト解放運動の統合と分断に関与しているのかを明らかにした。鈴木は「インドのダリト運動にみる権利意識と生存戦略」と題して、清掃職の民営化に伴う雇用の非正規化と労働組合の弱体化により、生活不安に直面したパールミーキが公益訴訟や路上でのストライキを行うことで福祉政策の拡充を求める動きに着目し、権利意識の形成、ダリト運動の排他性と協働性について考察した。石田は「現代ヒンディー文学のムスリム作家が描くムスリム像」と題し、インド・ムスリム作家、ラーヒー・マースーム・

ラザーのヒンディー語作品を分析し、日常の葛藤や不安、分離独立の影響、創作活動への偏見や圧力、ムスリム社会内部の諸問題に取り組む人々の姿を読み解いた。

(2)個別の研究成果

本研究では、「包摂と排除から共棲へ」という共通の視点に基づいて個別研究が行われた。各自の研究成果の概要は以下の通りである。

篠田は、グジャラート州における牧畜カーストを事例として、彼らの牛経済維持への役割がイギリス植民地期以降どのように変化したのか、「緑の革命」や「白い革命」により牛経済が崩壊した後の社会経済状況にどのように対応しているのかを考察した。植民地期、間歇的に発生した飢饉・旱魃により雄牛数は減少、開発と旱魃の影響による共有地の減少に伴い、牧畜カーストの定着化も進行し、牛の質も劣化し始めた。灌漑施設の所有・非所有が農業経営と在地社会のハイラルキー再編に決定的な影響を与え、家畜の所有構造では、富農層の雌水牛飼育と下層民の山羊飼育へと「酪農」形態の二極化が進んだ。独立後、従来の慣行権などによる社会的ネットワークとそれに基づく人間関係や社会関係を根底から覆す動きが畜産や酪農にも現れ、農民と牧畜カーストの関係が大きく変化した。家畜飼養の個別化と集約化が進み、牧畜カーストにとって畜産は持続可能な生業ではなくなり、「伝統的」職業である牧畜業からの離脱と職業転換が起こった。収入増と生活様式の変化が世帯とカーストの両レベルで喫緊の課題であると認識され、新たな挑戦が開始されるようになった。以上のように、農民と牧畜カースト間のネットワークや慣行権を軸とした「包摂」の関係は崩れ、「排除」の側面が顕在化し、彼らは牧畜業からの離脱と職業転換を通じて、社会経済政治力の獲得と新たなアイデンティティを模索している。これが地域社会やコミュニティの「共棲」と接点を持ちうるかどうか、今後の動向を注視する必要がある。

須田は、バングラデシュにおける女性海外出稼ぎ労働者増加の背景とその影響に焦点をあてた。2015年以降、毎年10万人を超える女性が中東産油国を中心に家事使用人として出国している。そこで、出国前研修の受講女性や中東で家事使用人として働いた経験のある女性に聞き取り調査を実施、以下の点を明らかにした。女性出稼ぎ者の大半は農村女性で、就学経験のない女性が半分を占める。出国前研修者に対する調査では、25歳(規制による最少年齢)以上の人が多いが、10代半ばのケースもみられた。ほとんどの女性が既婚者で子供がいる。夫との離婚、別居、死別等により男性の所得に頼れず、極端に困窮した女性が多い。海外出稼ぎで初めて有給の職に就く女性も多いが、家事使用人やアパレル工場での労働経験を持つ女性も多い。出国前研修時には「(勤め先でのハラスメントが心配で)怖い」、「(子供などを国に残すため)悲しい」という意見が多いが、「うきうきする」と前向きにとらえる女性もいる。中東で家事使用人の経験がある女性16人への聞き取りでは、多くは滞在中に大きな問題はなかったと答え、海外出稼ぎを人生の成功体験ととらえる女性が約半数いた。主な理由は所得増加による生活の向上だが、勤め先に恵まれて幸せな生活ができたと述べる女性も多い。中東への女性の出稼ぎ労働は低賃金で危険も多く、最貧困層の女性が最後にとる手段とみなされてきたが、女性とその世帯が貧困から脱する手段でもあり、女性自身の自己実現の方法でもあることが明らかになった。

鈴木は、デリーのパールミーキのフィールドワークに基づいて共棲の可能性について考察した。2010年代から加速する自治体清掃職の民営化は、雇用の非正規化と労働組合の弱体化をもたらし、清掃職に従事してきた多くのパールミーキが生活不安に直面している。このような問題を政府や市民社会に訴える手段として、公益訴訟や路上ストライキを通じて福祉政策の拡充を求める動きに着目し、権利意識の形成やダリト運動の排他性と協働性を明らかにした。さらに、カーストを越えた共棲の可能性として、都市の居住空間をカーストの観点から検討した。デリーおよびニューデリー自治体清掃労働者の大多数をパールミーキ出身者が占めており、彼らの居住区にはカーストの偏りがみられる。清掃労働者の居住区は居住と就業を併せ持つ空間であり、カースト成員の要求と生存戦略に根差した運動が生成される場でもある。フィールドワークからは、清掃業の下請けに反対し、公益訴訟により指定カースト留保の細区分を要求し、清掃部門の民営化によって正規の職が削減される状況に抗い、より広い政治的アリーナへの参入を模索していることが確認された。しかし、留保の細区分をめぐるでは、ダリト・カースト間で意見の相違があり、「ダリトの結束が損なわれる」という批判もある。以上、清掃業・非清掃業のカースト成員間の連帯や協働性が醸成される一方で、他のコミュニティとの断絶状況も観察された。今後は、カーストや宗教を越えたマイノリティの協働、共棲の可能性をいかにフィールドから見出すことができるかを検討する必要がある。

井上は、タミルナドゥ州のダリトの中で比較的政治的発言力の強いカースト、パライヤルが伝承する太鼓パライの演奏に伴う舞踊パライヤットムが、いかに宗教・政治・文化のシンボルとして機能しているかを分析した。従来、パライはメッセージ伝達やヒンドゥー女神の祭礼等の機会に演奏されてきたが、同時に死の穢れを伴う葬式に欠かせない楽器であり、パライヤルは穢れを背負う存在として差別されてきた。1990年代以降、パライヤットムは宗教とカースト政治が複雑にからみあいつつ展開するダリト解放運動のシンボルとなり、積極的な意味づけがされている。政治・宗教・ジェンダー等の文脈で抵抗のシンボルとして流用され、ダリト主体の政治・宗教集会に加え、多様な人々が集う州主催の文化祭等の様々な空間で欠かせない存在となった。パライヤルを中心とするダリト政党、解放パンサー党には仏教への集団改宗を指導したダリト政治家アンベードカル信奉者が多い。キリスト教への改宗者は「解放の神学」に基づきパライをキリストの身体そのものと解釈する。共産党毛沢東主義派はダリトを抑圧された労働者や

農民とみなし、武装闘争を通じた解放を目指す。ダリト女性の自立を目指し、従来は男性のみが演奏してきたパライを演奏する女性グループも存在する。今日、パライヤーッタムは州を代表する民俗芸能として認知され、その上演空間は「共棲」を体現しているかのように見える。一方、カースト政治から逃れられず、芸術と政治の狭間で矛盾を抱えた存在となっている。

石田は、ヒンディー語で執筆し成功した最初のムスリム作家であるラーヒー・マースーム・ラザーの作品の読解に基づき、今日のインド・ムスリムの立場について考察した。人口の約14%を占めるインド・ムスリムは、1947年の印パ分離独立以降、微妙な立場にある。まずは第一作の『半分の村』に描かれたムスリム・イメージについて明らかにし、その後の作品におけるイメージの変遷について考察した。彼の作品には自らの人生が反映されているものが少なくない。分離独立後、ラザーがインドに残留した最大の理由は、『半分の村』に明確に描写されている「故郷への愛着」であり、同様の描写はその後の作品にも繰り返し登場する。彼は、そもそもインドに残留することはムスリムにとって当然の権利であると主張する。その主たる理由は、インド・ムスリムの多くがヒンドゥーからの改宗ムスリムの子孫であることで、この点がヒンドゥーとムスリム双方に再認識されれば、インドにおけるムスリムの立場が変わると期待している。しかし、現実にはムスリムを取り巻く状況は複雑で、生活のためにムスリムであることを隠したり、ヒンドゥーとの恋愛や結婚が不調に終わって自ら人生を放棄したり、宗教暴動で命を絶たれたりという悲劇が後を絶たない。最後の作品で、ラザーは社会的弱者ではなくなった一部のムスリムとダリトが物欲に支配され、時代に翻弄される様子を淡々と描いている。人間社会が持つ業の深さに対する諦観が作者の到達した境地であると思われる。

(3) 英文成果報告書の概要

最終的に、2021年2月、Survival Strategies of Minorities in South Asia: From Inclusion and Exclusion toward Cohabitation と題する英文成果報告書を作成、海外の研究機関及び研究者、国内関連機関に配布、本研究の専用ウェブサイト(<http://www.ic.daito.ac.jp/~itakako/>)で公開した。その目次は以下の通りである。

Introduction	Takako INOUE
1.The Transformation of Food Habits in Modern India.	Takashi SHINODA
2.Bangladeshi Female Overseas Workers in the Middle East: Their Experiences and Perceptions of Overseas Employment.	Toshihiko SUDA
3.Securing Livelihood Entitlements and Space: A Case Study of Balmikis in Delhi.	Maya SUZUKI
4.The System of “Dry Latrines” and Scavenging in India:1870s-1990s.	Yui MASUKI
5.The Religion, Politics, and Cultural Activities of Paraiyars in Tamil Nadu: Paraiyattam as a Religio-Political Symbol.	Takako INOUE
6.Muslim Images Depicted in the Novels of Rahi Masum Raza.	Hideaki ISHIDA

本報告書では、「ゆるやかな共棲」の理論的発展と可能性について論じ、それに呼応する形で各自が個別の事例研究に基づく論文を寄稿した。「共棲」とは、多種多様な人々が居住する空間における生の不安定性について考察するために、バトラーが提示したものである。彼女は、地球上で人々が共棲する空間の選択不可能性と生の不安定性を指摘し、望まぬ隣人の生を保持する義務、そのための社会的諸条件を実現する義務、不安定性を最小化するための倫理的義務を求め、その実現には「連携(alliance)」が重要であると論じる。21世紀に入り「親密性の地政学(Intimate Geopolitics)」を提唱するようになったフェミニスト地理学者は、バトラーの議論に注目した。ペインとスレーリによれば「親密性の地政学」とは、個人の日常からグローバルな世界までを含む多元的な空間に焦点をあて、欲望・セクシュアリティ・結婚・家族・再生産といった私的領域における身体的・感情的実践とマクロな政治との相互作用を探求し、そこからグローバルな地政学や国際関係を逆照射することによって、複雑に発動する権力関係を再考しようとする試みである。しかし、ハーカーのようにバトラーの議論は現実社会の空間的側面をうまく描き出せておらず、倫理的義務の遂行がむしろ敵対関係を強めると指摘する者もいる。したがって、倫理的義務の遂行以前に、望まぬ隣人が自らの居場所を自らの力で確保し、確保した空間の継続的な維持を承認する必要がある。そのために協働してこそ連携も可能となり、生の不安定性を最小化するための現実的な実践につながるだろう。「ゆるやかな共棲」のためには、空間の共有と分有を実現するための合理的かつ説得力のある戦略を不断に実行することが求められる。

<引用文献>

- ユルゲン・ハーバマス他、公共圏に挑戦する宗教 ポスト世俗化時代における共棲のために、2014
- パルタ・チャタジー、統治される人々のデモクラシー サバルタンによる民衆政治についての省察、2015
- ジュディス・バトラー、アセンブリ 行為遂行性・複数性・政治、2018
- R. Pain, and L. Staeheli, “Introduction: Intimacy-geopolitics and Violence,” *Area*, 46(4), 2014, 344-347.
- C. Harker, “The Ambiguities of Cohabitation,” *Area*, 46(4), 2014, 355-356

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 10件）

1. 著者名 篠田隆	4. 巻 0
2. 論文標題 The Transformation of Food Habits in Modern India	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Survival Strategies of Minorities in South Asia: From Inclusion and Exclusion toward Cohabitation	6. 最初と最後の頁 11-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 須田敏彦	4. 巻 0
2. 論文標題 Bangladeshi Female Overseas Workers in the Middle East: Their Experiences and Perceptions of Overseas Employment.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Survival Strategies of Minorities in South Asia: From Inclusion and Exclusion toward Cohabitation	6. 最初と最後の頁 35-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 鈴木真弥	4. 巻 0
2. 論文標題 Securing Livelihood Entitlements and Space: A Case Study of Balmikis in Delhi	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Survival Strategies of Minorities in South Asia: From Inclusion and Exclusion toward Cohabitation	6. 最初と最後の頁 63-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 井上貴子	4. 巻 0
2. 論文標題 The Religion, Politics, and Cultural Activities of Paraiyars in Tamil Nadu: Paraiyattam as a Religio-Political Symbol	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Survival Strategies of Minorities in South Asia: From Inclusion and Exclusion toward Cohabitation	6. 最初と最後の頁 107-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 石田英明	4. 巻 0
2. 論文標題 Muslim Images Depicted in the Novels of Rahi Masum Raza	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Survival Strategies of Minorities in South Asia: From Inclusion and Exclusion toward Cohabitation	6. 最初と最後の頁 127-158
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 須田敏彦	4. 巻 58
2. 論文標題 増加するバングラデシュからの女性家事労働者 出国研修生へのアンケートから見える女性海外出稼ぎ労働者の姿	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『大東文化大学紀要 (社会科学)』	6. 最初と最後の頁 77-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 須田敏彦	4. 巻 212
2. 論文標題 バングラデシュ農村における若者の近未来の自画像 中学生を対象とした進路希望アンケート調査の分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『東洋研究』大東文化大学東洋研究所	6. 最初と最後の頁 1-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須田敏彦	4. 巻 59
2. 論文標題 開発に関わるバングラデシュ社会の問題とその歴史的背景 東ベンガルの社会形成史	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『大東文化大学紀要 (社会科学)』	6. 最初と最後の頁 41-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井上貴子	4. 巻 第23巻
2. 論文標題 仮面のカー南インドのナラシン八信仰と芸能ー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『宗教史学論叢23 媒介物の宗教史 上巻』	6. 最初と最後の頁 105-132
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上貴子	4. 巻 0
2. 論文標題 言語、カースト、宗教的アイデンティティの交錯ー首都圏の南インド系住民による音楽活動とコミュニティ形成ー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『音楽コミュニティとマイノリティー多文化共生の実践と課題ー』	6. 最初と最後の頁 32-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井上貴子	4. 巻 61巻1号
2. 論文標題 書評 志賀美和子著『近代インドのエリートと民衆：民族主義・共産主義・非バラモン主義の競合』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『アジア経済』アジア経済研究所	6. 最初と最後の頁 80-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24765/ajiakeizai.61.1_80	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井上貴子	4. 巻 第23、24巻
2. 論文標題 仮面の力 南インドのナラシン八信仰と芸能	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『宗教史学論叢 媒介するもの/モノの宗教史』宗教史学研究所	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 篠田隆	4. 巻 208号
2. 論文標題 インドにおける食料消費・食習慣の変化と宗教・社会集団 「インド人間開発調査」個票データの分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『東洋研究』大東文化大学東洋研究所	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 篠田隆	4. 巻 57
2. 論文標題 インド・グジャラート州の中小零細企業と宗教・カースト	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『大東文化大学紀要(社会科学)』	6. 最初と最後の頁 95-113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 須田敏彦	4. 巻 Mar-19
2. 論文標題 Book Review "Remittance Income and Social Resilience among Migrant Households in Rural Bangladesh by Mohammad Jalal Uddin Sikder, Vaughan Higgins, and Peter Harry Ballis"	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The Developing Economies	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件(うち招待講演 5件/うち国際学会 4件)

1. 発表者名 井上貴子
2. 発表標題 言語、カースト、宗教的アイデンティティの交錯—首都圏の南インド系住民による音楽活動とコミュニティ形成—
3. 学会等名 日本音楽学会東日本支部第59回定例研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井上貴子
2. 発表標題 古代日印芸能文化交流史
3. 学会等名 同人会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井上貴子
2. 発表標題 インド系諸語における音楽関連用語とその解釈をめぐって
3. 学会等名 政治経済学経済史学会「音楽と社会フォーラム」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 篠田隆
2. 発表標題 Transformation of Food Habits in Modern India
3. 学会等名 Sardar Patel Institute of Economic & Social Research
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井上貴子・野火杏子
2. 発表標題 聖と俗のはざまで<愛>を歌い踊る クリシュナ神をめぐる断章
3. 学会等名 日本南アジア学会設立30周年記念連続シンポジウム仙台大会「南アジアにおける表象と身体」(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井上貴子
2. 発表標題 日本の南インド系住民と共に作る音楽活動
3. 学会等名 「風のように旅をする音楽 小笠原、日本、ブラジル、インド」企画講演会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井上貴子
2. 発表標題 Indo-Japan Cultural Relations through Buddhism and Allied Performing Arts
3. 学会等名 Special Lecture at VIT - AP (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井上貴子
2. 発表標題 Indo-Japan Cultural Relations through Buddhism and Allied Performing Arts
3. 学会等名 Guest Session on India-Japan Relations, Department of International Studies and History (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井上貴子
2. 発表標題 Indigenization of Traditional Performing Arts in Japan: Transformation of Indian Elements in Gagaku
3. 学会等名 'India and Japan: Unearthing Lesser-known 16th to Early 20th Century Linkages' India International Centre & Mombusho Scholars Association of India (MOSAI) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井上貴子
2. 発表標題 Musical Activities among South Indians around Tokyo
3. 学会等名 'Through the Looking Glass' MSA/ACMC/Indigenous Symposium (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井上貴子
2. 発表標題 首都圏在住ニューカマーインド人のコミュニティ形成 家族形成, 学校教育, 文化活動をめぐって
3. 学会等名 政治経済学・経済史学会春季総合研究会 日本における「外国人問題」の歴史的位相 「共棲」視点からの「公共圏」への問い (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井上貴子
2. 発表標題 タミルナドゥ州におけるパライヤルの宗教・政治・文化活動 太鼓パライは誰のものか
3. 学会等名 日本南アジア学会第33回全国大会パネルセッション3 インドにおけるマイノリティの生存戦略 「ゆるやかな共棲」に向けて
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木真弥
2. 発表標題 生きられる「ダリト性」と運動の契機 高学歴ダリト若者の「カミングアウト」から考える
3. 学会等名 2020年度第8回FINDAS研究会 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「南アジアの社会変動・運動における情動的契機」(2020年度第4回研究会と共催)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木真弥
2. 発表標題 インドのダリト運動にみる権利意識と生存戦略
3. 学会等名 日本南アジア学会第33回全国大会パネルセッション3 インドにおけるマイノリティの生存戦略 「ゆるやかな共棲」に向けて
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石田英明
2. 発表標題 現代ヒンディー文学のムスリム作家が描くムスリム像
3. 学会等名 日本南アジア学会第33回全国大会パネルセッション3 インドにおけるマイノリティの生存戦略 「ゆるやかな共棲」に向けて
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 篠田 隆	4. 発行年 2019年
2. 出版社 日本評論社	5. 総ページ数 536
3. 書名 『インドにおける経営者集団の形成と系譜』	

1. 著者名 篠田隆	4. 発行年 2021年
2. 出版社 日本評論社	5. 総ページ数 480
3. 書名 『インドにおける牛経済と牧畜カースト』	

1. 著者名 井上貴子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 269
3. 書名 「歴史を書く人、歴史に書かれる人」恒木健太郎・左近幸村編『歴史学の縁取り方 フレームワークの史学史』	

1. 著者名 石田英明	4. 発行年 2021年
2. 出版社 白桃書房	5. 総ページ数 420
3. 書名 「インド文学の個性」佐藤隆広・上野正樹編『図解インド経済大全』	

1. 著者名 石田英明	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京外国語大学拠点南アジア研究センター	5. 総ページ数 425
3. 書名 「ヒンディー文学の世界 現代インドの心を知る」粟屋利江・太田信宏・水野善文編『言語別南アジア文学ガイドブック』	

1. 著者名 鈴木真弥	4. 発行年 2020年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 296
3. 書名 「南アジア系移民の世界」石坂晋哉・宇根義己・舟橋健太編『ようこそ！南アジア世界へ 地域研究のすすめ』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

南アジア共棲科研
<http://www.ic.daito.ac.jp/~itakako/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	須田 敏彦 (Suda Toshihiko) (00407652)	大東文化大学・国際関係学部・教授 (32636)	
研究分担者	篠田 隆 (Shinoda Takashi) (20187371)	大東文化大学・国際関係学部・教授 (32636)	
研究分担者	石田 英明 (Ishida Hideaki) (80255976)	大東文化大学・国際関係学部・教授 (32636)	
研究分担者	鈴木 真弥 (Suzuki Maya) (30725180)	大東文化大学・国際関係学部・准教授 (32636)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 アムラーヴァティー大学・NPO法人「太陽と水と緑のプロジェクト」合同研究集会	開催年 2018年～2018年
--	--------------------

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------